

サムウェアズ・エニウェアズの心理的性質と 政策支持傾向の関係に関する研究

小林 快斗¹・川端 祐一郎²・藤井 聡³

¹ 非会員 株式会社大塚商会（〒102-8573 東京都千代田区飯田橋 2-18-4）

E-mail: a0140816f@gmail.com

² 正会員 京都大学大学院助教 工学研究科（〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂 4）

E-mail: kawabata.yuichiro.8x@kyoto-u.ac.jp

³ 正会員 京都大学大学院教授 工学研究科（〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂 4）

E-mail: fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

近年、先進国の政策決定が、「地元」コミュニティに根付いた人々を意味する「サムウェアズ」と、地域や国境を越えた活動を重んじる「エニウェアズ」の 2 グループの対立により大きく左右されているという理論が提唱されているが、その妥当性を実証的・定量的に検証する学術的な試みは殆ど行われていない。そこで本研究では、この価値観分類が政策支持意識やパーソナリティと関連しているのかどうか、どのような属性の人がサムウェア又はエニウェアになりやすいのか等について、調査を通じて検証することとした。分析の結果、エニウェアの傾向の強い人が新自由主義的政策を支持しがちであること、サムウェアズはエニウェアズと比べて道徳的である可能性が高いことが示唆された。また、「現在地に長く住んでいる人」がサムウェアズ的である一方、所得、学歴、職業、居住地等による違いは小さいことが分かった。

Key Words: 地域, 定住, Somewheres/Anywheres, 大衆性, 新自由主義

11. 本研究の背景と目的

2016年にBrexit（イギリスのEU脱退）が可決されたことと、アメリカでトランプ氏が大統領選に勝利したことは、ともに識者の大方の予想を裏切る結果であり、その原因についての議論が噴出した。その中でイギリスのジャーナリストであるグッドハートは、従来の「右と左」や「保守とリベラル」、「富裕層と貧困層」といった対立軸は政策支持傾向の分析枠組みとしての有効性が低下していると指摘した。そして、「どこか」の地域に長期的に根ざし、定住して生きていく、比較的保守的で中低所得の層を「サムウェアズ」（Somewheres）と呼び、仕事さえあれば「どこでも」暮らせるという比較的リベラルで高学歴・高所得な層を「エニウェアズ」（Anywheres）と呼んで、この両者のあいだにはさまざまな価値観の違いがあり、これがトランプやブレグジットに対する支持／不支持を分ける要因になっていると主張した¹⁾。類似の議論はいくつか存在したが^{2,3)}、これらの議論で重要なのは、高所得層と低所得層のあいだの「利害」の対立や、「保守対革新」といった従来型のイ

デオロギー対立ではなく、地域観や人生観といった素朴な「価値観」こそが、政策をめぐる議論を分けているという認識である。

ただし、こうしたグッドハートの説に基づき近年の政策動向を学術的・定量的実証研究はいまだなされていない。また、仮にグッドハートの仮説が欧米諸国で実証されたとしても、日本において同様のことが言えるとは限らない。日本においても、1980年代以降に民営化や労働規制の緩和など新自由主義的政策が進められ、その結果として賃金格差が拡大したが、自民党政権への支持は基本的に根強く、単なる一般国民の「利害」だけで政治的な支持が決まっているようには思えない。つまり、グッドハートらが主張するような、エニウェアの「価値観」が、階層やイデオロギーを超えて広がり、それが政策支持の規定要因となっている可能性も十分に考えられ、検証に値すると言える。

また、グッドハートは、エニウェアの政策路線が文化や価値観など「ナショナルなものを破壊」しかねないものであると懸念するとともに、エニウェアズの価値観が「個人主義的」であることの問題を繰り返し指摘して

いる。これは「利他性」や「道徳性」を損ねる要因にもなりかねない。グッドハートは「エニウェアズが道徳的に劣っている」と論じているわけではないが、共同体の安定と道徳性の関係を論じた様々な理論の基づくと⁵⁶⁾、エニウェア的傾向が道徳の軽視につながる可能性も否定できない。また、共同体精神が低いと道徳性低下の要因である「大衆性」が高まるといった視点の議論も存在している⁸⁾。仮に、サムウェアズとエニウェアズを比較した際に、後者の方が一般的な道徳に対して否定的な傾向を持つという事実を確認することができれば、エニウェアズの政策が社会に対して破壊的であるということをさらに裏付ける根拠となり得る。

そこで本研究では、日本国内でアンケート調査を行い、まず人々のサムウェアズの価値観とエニウェアズの価値観を計測しながら、そうした価値観が新自由主義的政策への支持につながっているかどうかを調べる。その上では、サムウェアズに比べ、エニウェアズが何らかの意味で道徳的に問題のある価値観を持っていると言えるのかどうかについても検証する。「道徳的」「非道徳的」であることを客観的に定義し実証的に議論することは難しいが、例えば利他的であるか否かや、共同体の維持に条件できるのかどうかといった傾向は、限られた意味ではあるが道徳的な問題として分析可能である。そして、エニウェア的価値観に何らかの利点もあるのだとしても、道徳上の難点もあるのだとすれば、その価値観により推進される政策に対して注意が必要であるという実践上の知見を得ることができる。

仮にこれらのことが実証的に確認されれば、我が国においても、従来の「左と右」「革新と保守」「上流と下流」といった対立軸ではなく、「移動を好むか、定住を好むか」といった価値観の軸にしたがって政策課題を整理すべきであるということが明らかになる。そのことを通じて、公共的な議論がより国民の価値観構造を捉えた合理的なものとなると共に、ひいては安心して暮らせる幸福な社会づくりに繋がるような効果を得ることが、本研究の目的である。

2. 既往研究と本研究の位置付け

(1) 新自由主義への反動

欧米では 1980 年代ごろから、新自由主義的・グローバリズム的な政策が推し進められてきた。スティグリッツ⁹⁾は、エスタブリッシュメント層がグローバリゼーションに関する誤ったイデオロギーを抱いているとともに、それに気づき反省しようとしていないことこそが現代の重要な問題であると論じている。中野¹⁰⁾は、そのイデオロギーとはどのようなものかを要約して、「グローバ

リゼーションによってヒト・モノ・カネが国境を越えて簡単に移動できるようになることで各国に経済的な繁栄をもたらす。それにより各国の経済の相互依存が高まることで国家間の戦争は割に合わないものとなる」というものであると指摘している。柴山¹¹⁾は、日本のポピュリズムと今欧米で起きているポピュリズムは違うものであると言う。日本のポピュリズムは、マスコミを味方につける。これは 1980 年代にサッチャーやレーガンがとった「大衆迎合」的なものと同じであるが一方、2016 年大統領選以来のトランプのポピュリズムは、その逆にマスコミを敵に回す形である。これはアメリカの有権者の半分がマスコミを「敵」とであると認識しているから成り立つポピュリズムであって、日本では今のところ起こりえそうにないものであると柴山は指摘している。施¹²⁾は、グッドハートの主張を引き合いに出しながら、昨今のポピュリズム運動は格差や貧困などの経済的状況に対する不満から生じているというよりも、むしろ「文化的アイデンティティ」の確認を求めるものだと捉えるべきだと述べる。

(2) エリートと庶民の文化的価値観の違い

「新自由主義の反動」としてブレグジットやトランプ現象を理解する説は、新自由主義体制の中で、移民の増加とそれによる賃金低下などによって労働者の利益やナショナルなものが損なわれ、投資家や経営者などエスタブリッシュメントの利益が過度に優先されてきたことに起因する、庶民の「不満」や「不安」に注目するものだ。しかし施の主張のように、そうした経済的な利害だけではなく、あるいはそれよりも、エリート層と庶民層の間にはナショナル・アイデンティティ等をめぐる「文化的」な差異があり、それに起因する対立がブレグジットやトランプ大統領誕生の背景にあるという説も存在する。

アメリカの法学者チュアは、この現象を「エリート層に対する庶民の反乱」だと論じているが、それは経済的利益を奪われたことに対するものでは必ずしもない。トランプ自身はもちろん庶民ではなく「エリート層」「富裕層」に当たる人物で、労働者の同類とは言いがたい。所得の低い労働者たちが「お金持ち」を恨んでいるのであれば、大富豪であるトランプを支持するということはある得ず、それ以上に、粗暴で単刀直入で、労働者が考える意味での「アメリカ的素朴」さを持ったトランプが、気取ったエリート層と戦っている姿を見て、直感的に「トランプは仲間、ヒラリーは敵」と白人労働者たちは判断したとチュアは分析する²⁾。

また、チュアと同じくアメリカの法学者であるウィリアムズ¹³⁾は、エリート(専門職階級)がどのように庶民(白人労働者階級)を見下し、庶民はエリートをどう目の敵にしているかについて具体例を挙げつつ、職業観や家族

観、人生観の違いについて説明している。たとえば、庶民は「体を動かす作業」を仕事だと考える人が比較的多く、「座ってペンを動かすだけ」のエリートたちの仕事を馬鹿にし、大学出身の管理職に対しては「交渉の駆け引きや人を動かす方法だけに長けていて、仕事の中身はなにも知らないガキ」というような否定的なイメージを抱いている。また、庶民の子供たちは「人生の価値は家族で決まる。親の面倒は見て当たり前」と教え込まれている一方、エリートの家庭では「子供は巣立っていくもの」という考えのもと育てられており、実際地元にはほとんど帰らない。そのため、庶民の家庭に生まれながらエリート職に就いた人々は、仕事仲間たちの家族への態度がきわめて冷淡であることに驚くという。また、「地元で仕事がない」という事態は、庶民にとっては大変なことである。地元には生活をお互いに支えあうコミュニティが存在しており、そこには小さい頃からの顔なじみもいて、人生の満足感に結び付いているのだ。しかし、仕事の成功こそが自己実現と考えるエリートたちは、仕事がなく困っている庶民の話の聞くと、「景気の良い地域に引っ越せばよいのではないか」という見解を述べがちのようである。

これはまさに、地元で定住することに幸福を見出している庶民（グッドハートの用語で言えばサムウェアズ）の価値観を、エリート層（同じくエニウェアズ）が全く理解できていないことを示唆している。ウィリアムズは、以上のような文化や価値観の壁を完全に克服することは難しいが、そのような壁があることをお互いが認識すること、そしてエリートは庶民の文化の理解に努めエリートの文化を真理だと思込めないことが大事であると述べている。

(3) 「エニウェアズ」と「サムウェアズ」—現代の政治的対立を説明する価値観軸

こうした、現代におけるエリートと庶民の文化的な対立について、恐らく最も包括的な議論を行っているのがグッドハートである。上述のチュアやウィリアムズが述べていることも、大まかにはグッドハートの理論の中に包摂される論点であると考えられる。彼はイギリス国民を価値観、生活様式に基づいて2つのグループ「サムウェアズ(庶民)」「エニウェアズ(エリート)」に分けることで、主要な政治的・文化的対立について整理することができる」と論じている。

サムウェアズは、一定範囲に定住して暮らす人々を表し、日本語では「どこかに族」とも訳される。グッドハートが描写するサムウェアズの主な特徴は以下のとおりである。

- 所得や社会階層においてほとんどが下位 3/4 に属し

ており、多くは高等教育を受けていない

- 投票においては保守党や UKIP を支持しており、かつては労働党支持者だった人々も多く含まれる
- サムウェアズはエニウェアズより数が多く、幅の広いグループであるのにも関わらず、政治的な発言力は弱い
- 一般的に変化を好まず、高齢のサムウェアズは古き良きイギリスに対して郷愁の念を抱く
- 安心して暮らせることや慣れ親しんだものに価値を置く
- 地域や国家などに強い帰属意識をもつ
- 生活が便利になるような「技術革新」は受け入れるが、いまだに伝統的な家族形態に価値を置き、なんでもよしの態度には懐疑的
- 極端な権威主義者ではないものの、今よりももっと形の整った「伝統的な世界」が失われていったことを残念に感じている

一方、エニウェアズは仕事があればどこでも暮らしていけるような人々を表し、「どこでも族」とも訳される。グッドハートが述べるエニウェアズの主な特徴は以下である。

- 多くは所得と社会階層の上位 1/4 に属していて、社会全体に特別な責任感を感じている者がかなり多い
- あらゆる主要な党に投票する。特に、労働党、英自由民主党や緑の党などのリベラル政党
- 一般的に社会移動性の高い少数派に属しており、大学には下宿から通い、卒業後は育った場所に戻ることなくエリート専門職に就く
- ロンドンや、大学街といった大都市の中心部にかなり集中している
- 変化を好み、古き良きイギリスに対する郷愁の念を抱かない
- 人種や性、ジェンダー、社会的階級などに対する態度は完全に平等主義的、能力主義的である。また、平等主義や能力主義を推し進めるべきだと思っている。
- ボーダレスな世界を実現したいとまで考えているわけではないが、ナショナルなものも含めて、大きなグループアイデンティティには強く執着しない個人主義者であり、国際主義者である
- 自律性や自己実現に安定性、共同体、伝統などよりも価値を置いている

生まれ育った地（もしくは慣れ親しんだ土地）に定住することを好むサムウェアズは、移民の影響によって既

存のコミュニティや風土が破壊されることを好まない。そのため、多くが（移民の流入を促進してきた要因である）EU からの離脱を支持した。一方でエニウェアズは「根無し草」的特徴を持ち、イギリスのナショナル・アイデンティティや地域独自のコミュニティや風土が変化することを厭わず、また、平等主義者でありナショナリストでもあること、そして学識があるため EU から受けている経済的な効果についても知識を持っていることもあり、多くが EU 残留を支持した。

普段の政治の場では、エリートであるエニウェアズが多数派を占めるためにサムウェアズの発言力は弱かった。ところが、数が物を言う国民投票の場において、サムウェアズがついに逆襲をしたのだとグッドハートは言う。サムウェアズは帰属意識が強く、慣れ親しんだものに価値を置くために、多数の移民によって彼らが属するコミュニティの風土が変化することを好ましく思わない。一方で、政治権力を持つエニウェアズは、グループアイデンティティに執着しないため、積極的に移民を受け入れてしまう傾向がある。グッドハートは、人数自体は多数はであるものの政治的にはマイノリティであるサムウェアズの意見が、これまでの政治において軽視されてきてしまっている現状を指摘するとともに、さらにその行為が行き過ぎた場合に自国の文化や生活様式が破壊されるという危険性にエニウェアズが気づいてはいないことに対して警鐘を鳴らしている。

この問題に関しては、日本も例外ではないだろう。法務省の統計¹⁶⁾を参考にすると、2012年から2018年にかけて日本の在留外国人数は平均して約10万人ずつ増加している。これに対して日本の人口は約1億3000万人である。イギリスが受け入れている移民数は、EU内外併せて毎年約40万人であり、イギリスの人口は約6700万人であることを考えれば、人口に対する移民の割合を比べると日本はイギリスの8分の1程度にしかならない。しかし、2018年に入管法改正が可決され今後さらに在留外国人が増加していくことが十分に考えられ、中長期的な視点で見た場合には、いずれ日本も同様の問題に直面する可能性は高いと考えられる。

また、現在日本でも過去数十年に渡って様々な新自由主義政策が推し進められてきており、所得格差の拡大などを招いていると言われるが、これがいわゆるエニウェアズ寄りの政策体系であることは明らかである。ただし、こうした政策の選択が、サムウェア／エニウェアといった価値観の区別によって説明されるかどうかは、今のところ明らかでない。欧米で生じている事態と同様なのか、あるいは差異があるのかといったことも含めて、サムウェア／エニウェアという文化的価値観の違いが、新自由主義的政策の選択行動に及ぼす影響については、十分に調査を行う必要があると言える。

(4) ブレグジット研究

Takら¹⁷⁾は、イギリス国内で2009年から2010年の間で収集された全国調査を用いて、2つの仮説について検証している。1つは、「ブレグジットは経済的に左翼的な考えを持つ者による反乱である」というもの。2つ目は、「ブレグジットはイギリスのナショナリズムの復活である」というものである。前者は、ブレグジット支持の差を経済的な側面に注目して説明しようとするものであり、常に一貫した傾向がみられたわけではないものの、比較的貧困状態にある人や、中国からの輸入品が浸透している地域に住む人々は離脱賛成派がやや多いことが実証的に示された。一方後者は、文化的な側面に注目した説明であり、ブレグジット支持の層を分ける指標は社会的「階級」ではなく、社会的「地位」とであると述べられている。また、自分は「イングランド人である」というよりも「ブリテン人である」という意識が強い人や、雑食的な文化消費をしている人のほうが、ブレグジットの支持率が低いという。Takらの研究では、前者に比べ後者の説を支持する要素が多く、ブレグジット支持に対しては文化的側面の影響が特に大きかったであろうと結論付けている。

ブレグジットの投票に関して、EU残留派を支持した「コスモポリタン」とEU離脱派を支持した「地元根差した人々」の対立として説明する議論は増加しているが、Neilら¹⁸⁾は、「居住不動産性(residential immobility)」という概念に注目することで、こうした説を実証的に分析している。具体的には、地元根差している人を「生まれた州に住んでいる人」と定義し、それを居住不動産性という変数とし、その変数がブレグジット支持に与える影響について調べている。その結果、地元根差している人は、EU離脱を支持する可能性が7%高いことがわかった。しかし、この変数が与える影響は一貫していたわけではなく、比較的経済が衰退している地域や、移民の人口が増加している地域にとってのみ当てはまるものであったと述べられている。

Eleonoraら¹⁹⁾は、ブレグジットの支持要因を様々な説明変数に注目することで、より詳しく分析している。例えば、離脱への投票は、高齢者、白人民族、低学歴者、スマートフォンやインターネットの利用頻度が低い者、給付金の受領者、健康状態の悪い者、生活満足度の低い者が行っている傾向があり、また、似たような社会経済的特徴を持つ個人の間では、労働党支持者は残留支持者の方が多いのに対し、保守党支持者は離脱支持者の方が多くも示している。ただし、離脱支持、残留支持共にその傾向が強い地域ほど有意度は高いというように、精度は地域ごとに不均一であった。

(5) 日本における地元志向と文化的意識の関係

我が国においては、上述のような「定住志向」と「政策選択」の関係といった論点をめぐる研究は多く行われているわけではない。ただし、地元定住を志向する心理についての調査研究は少数存在している。

前村²⁰⁾は、定住や移動を発生させる個人の心理的特性として「定住志向」と「異文化志向」に焦点をあて、二つの志向性の測定と関連性の分析を行った。対象者は大阪府吹田市、京都府京田辺市、沖縄県中城村の住民であり、郵送法によって質問紙調査を実施した。その結果、「定住志向」と「異文化志向」には逆相関がみられること、「定住志向」においては地域差が見られ、都市部（吹田市）では他の2地域に比べ定住志向が低いことを明らかにしている。また「異文化志向」は若い世代、高学歴者であるほど高く、「定住志向」は高齢世代・学歴が低いほど高い傾向が示されている。

また米原²¹⁾は「地元」を「ある個人が自分の育ってきたと認知する地域」と定義し、さらに、「地元志向」を「ある個人が自分の育ってきたと認知する地域（＝地元）へと向かう志向」と定義したうえで鳥取大学の学生らに対し、質問紙調査を行い、地元志向にどのような個人的特性が関連しているのかを検討した。その結果、地元志向尺度において「地元への定住意向」「地元への愛着」という二つの要素からなる因子的妥当性を確認した。また「異文化志向」の強まりが「地元への定住意向」を弱める影響を与えており、「自民族中心主義」が「地元への定住志向」「地元への愛着」を強める影響を与えることを確認している。

片岡²²⁾は、グッドハートが提唱した「サムウェア」「エニウェア」という概念に着目し、近年大学等を卒業して就職した、もしくは就職する予定である若者に対して調査を行っている。若者たちのサムウェア性・エニウェア性を計測した上で、それが「就職地を地元とするか、それとも地元外の東京などの大都市とするか」という選択にどのように関わっているかを分析した。その結果、サムウェア度が高いほど、地元に残ろうとする傾向が強いこと、そして若者の就職地選択においては、「雇用」の存在と「家族」のいる土地であるか否かが、重要な影響を及ぼしていることを明らかにした。

しかしこれらの研究はいずれも、定住志向やサムウェア性と「政策選択」の関係については論じていない。また、第1章で指摘したような、エニウェアズがナショナルなものを「破壊」したり、道徳性に反するような傾向を持つほど問題性のあるものであるか否かについても、検証は行われていない。

(6) 本研究の位置づけ

グッドハートの「サムウェアズ」「エニウェアズ」論は、土地への愛着感をベースに、経済的、文化的、社会的な各種要素を包括的に加味した概念によって国民を2グループに分割するもので、その区分けは直感的にも理解がしやすく、有用なものである。しかし、この概念に基づいた定量的・実証研究は未だ不足している。また、イギリスやアメリカと日本では、文化的にも様々な点で異なるため、同じ指標がわが国でも有用であるかはわからない。また前章で述べたように、ナショナルなものや共同体的なものの破壊は、ひいては道徳性の欠損につながる可能性もあり、そもそもエニウェア的価値観そのものが、何らかの意味で適切な道徳をないがしろにする面を持っていることも否定はできない。

そこで本研究では「地元への志向性」及び関連する様々な価値観と、新自由主義的政策への支持意識に関するアンケート調査を行い、人々のサムウェア性とエニウェア性を計測した上で、それが政策選択にどのような影響を及ぼしているか、そして「利他意識」や「大衆性」といった、道徳性に関わる指標とどのように関連しているかについて、検討することとする。

3. 研究方法

(1) 仮説の設定

本研究の目的は、サムウェアズの価値観やエニウェアズの価値観が新自由主義政策への支持意識に影響を与えているのかどうかを検証し、その上で、グッドハートが主張するようにエニウェアズの価値観がナショナルな文化や道徳的秩序に悪影響を与えるものであると言えるのかを、検証することである。そのため、本研究では以下の2つの仮説を検証するため、調査と分析を行う。

仮説 1「エニウェア的傾向を持つ人ほど、新自由主義的政策を支持する傾向にあり、逆にサムウェア的傾向を持つ人ほど、支持しない傾向がある」

仮説 2「エニウェア的傾向を持つ人は、サムウェア的傾向を持つ人に比べて、道徳性に劣る点がある」

また、仮に上記の仮説が支持される結果が得られたとして、グッドハートも主張しているようにエニウェア的政策の過度な推進を抑制し、サムウェアの価値観に沿った政策をより活性化するためには、双方のニーズを聞きまた双方に働きかける必要があることから、どのようなサムウェア／エニウェア傾向を持ちやすいのかを理解することが必要である。また、グッドハートの主張するように、学歴や職業や居住地がこれらの傾向に関与しているか否か確認することも、サムウェア／エニウェア概念

表-1

職業についての選択肢	
1	会社勤務（一般社員）
2	会社勤務（管理職）
3	会社経営（経営者・役員）
4	公務員・教職員・非営利団体職員
5	派遣社員・契約社員
6	自営業（商工サービス）
7	SOHO
8	農林漁業
9	専門職（弁護士・税理士等・医療関連）
10	パート・アルバイト
11	専業主婦
12	学生
13	無職
14	その他の職業

表-2

子供の数についての選択肢	
1	0人
2	1人
3	2人
4	3人
5	4人
6	5人
7	6人以上

表-3

学歴についての選択肢	
1	中学校
2	高等学校
3	専門学校
4	高等専修学校
5	高等専門学校
6	短期大学
7	大学
8	大学院
9	その他（ ）

表-4

世帯年収についての選択肢	
1	200万円未満
2	200万～300万円未満
3	300万～400万円未満
4	400万～500万円未満
5	500万～600万円未満
6	600万～700万円未満
7	700万～800万円未満
8	800万～900万円未満
9	900万～1000万円未満
10	1000万～2000万円未満
11	2000万～3000万円未満
12	3000万円以上
13	答えたくない

の有効性を検証する上で必要であろう。

そこで、人々の個人属性がサムウェア／エニウェア傾向にどのような影響を与えているかを、あわせて調査・分析する。この点について、グッドハートの議論に従うと、以下のような仮説を設定することが可能である。

仮説 3 「都会出身の人、都会在住の人、現在の居住地での居住年数が短い人、引っ越し回数が多い人、高学歴の人、高年収の人ほど、エニウェアズになりやすい」

以上の仮説を検証するため、以下で述べるアンケート調査を実施した。

(2) 調査実施概要

本研究では、クロスマーケティング社のインターネット調査サービスに加入している全国の 20 歳以上のモニター1200名に対し、Webによるアンケート調査を行った。調査期間は、2021年1月15日～1月18日である。本調査における質問項目について示す。本調査票の構成は大枠では以下のようになっている。

SC1～SC13：個人属性

Q2：大衆性尺度

Q7：サムウェア尺度，エニウェア尺度

Q8：新自由主義支持意識尺度

Q9：対象別利他行動尺度，共感性プロセス尺度

他研究との共同アンケート調査であったため、質問番号は一部連続していない。

調査票の全体詳細は付録を参照されたいが、次節にて、分析に使用する各尺度の質問項目及びその設定理由について述べる。

(3) 調査項目の内容及び設定理由

個人属性調査として「性別」「年齢」「現在の居住地(都道府県)」「現在の居住地(市区町村)」「居住年数」「出身地」「出身地について都会と思うか、田舎と考えるか」「引っ越しの経験回数」「職業」「最終学歴」「世帯年収」「未婚か既婚か」「子供の数」の計 13 項

表-5

サムウェア尺度
1 自分の生まれ育った地域や母国に帰属意識を感じる
2 海外の人々の幸福よりも、自国民の幸福を優先するべきだと思う
3 社会が急速に変化していくことについて、あまり快く思わない
4 実力主義的な社会は望ましくないと思う
5 治安が良いことや地域に馴染みがあることは、良いことだと思う
6 秩序や伝統に裏打ちされた社会が望ましいと思う
7 社会においては、自由よりも安全が優先されるべきだと思う

表-6

エニウェア尺度
1 自分は世界市民の一人だと思う
2 世界の人々は人種や男女の違いを問わず、皆平等であると思う
3 自立することや自己実現が、安定性や共同体、伝統よりも大事であると思う
4 移民を受け入れることや、国境がボーダレスとなることに寛容である
5 進学や就職で地域間を移動することをいとわない
6 移動が自由にできることは、良いことであると思う
7 新しいものには、高い価値があると思う
8 仕事は人生そのものであり、自己実現である（の結果である）
9 人生における成功体験が自分のアイデンティティのベースとなっている

目を設けた。「出身地」は回答者にとって最も親しみを
持てる場所を回答として得るために、高校生まで住んで
いた場所や実家がある場所を指定して質問した。「引
越しの経験回数」では回答者が渡り歩いてきた地域コミ
ュニティの数を回答として得るため都道府県をまだいた
移動を引越しとしてカウントするよう指定した。「職
業」「最終学歴」「世帯年収」「子供の数」についての
質問の選択肢は以下の表-1 から表-4 にて示す。

これらの項目を統制変数として用いて、仮説 3 の確認
を行った。

(4) サムウェア尺度とエニウェア尺度

説明変数として利用する「サムウェア尺度」「エニ
ウェア尺度」の質問文については、第 2 章で言及した片岡
22)の研究と同様のものを使用した。この尺度は、グッ
ドハートの『The Road to Somewhere』の原文から、主語が
サムウェアズ、エニウェアズである文章や、文脈上サム
ウェアズ、エニウェアズの性質について描写していると
考えられる文章を抜き出し、日本語に翻訳の上分類整理
することで、質問項目群を導き出している。またその際、
質問文は、著作の原文の直訳ではなく、原文の意を損ね
ない範囲で、回答者の答えやすさを考慮したうえで改変
した訳文を用いている。

質問は、「サムウェア尺度」に該当する質問 7 問、

「エニウェア尺度」に相当する質問 9 問から成る。具体
的には、表-5、表-6 に示す。これらの全質問に対し、
「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」「ど
ちらでもない」「やや当てはまる」「とても当てはまる」
の 5 件法で回答を求めた。

なお、次章で説明するように、因子分析の実施を通じ
て質問項目の整理を行った。また、2 次元の尺度では互
いに相反する傾向としてのサムウェア性・エニウェア性
を論ずることができないことから、主成分分析及び中央
値で分割する方法により、比較を可能にするための工夫
を行った。

(5) 新自由主義支持意識の測定尺度

仮説 1 を検証するために、新自由主義政策への支持意
識を調べる必要がある。この意識を定量化する変数とし
て、沼尻²³⁾の新自由主義支持意識尺度から 4 項目（表-7
の 1 から 4 を引用し、それぞれ「まったくそう思わない」
から「とてもそう思う」までの 5 件法で解答を求めた。
また、近年の日本で検討ないし実施されてきた現実の政
策に対する支持意識を調査するため、表 7 の 5~14 の項
目を新たに作成した。

(6) 道徳性を測る尺度

表-8

対象別利他行動尺度	
家族	1 家族の誰かが調子が悪そうなとき、手伝ってあげる
	2 家族の誰かが高いところにあるものを取ろうとしたとき、取ってあげる
	3 家族の誰かが機嫌が悪いとき、相手に合わせる
	4 家族の誰かが病気のときには看病する
	5 家族の分のお茶をついであげる
	6 家族の誰かが重い荷物を持っているときには手伝う
	7 家族の誰かの家事（料理、掃除、ごみ捨てなど）を手伝う
友人	8 友人や知人の悩みや愚痴を聞いてあげる
	9 友人の誕生日を祝ってあげる
	10 友人が行きたい場所につき合って一緒に行く
	11 気持ちの落ち込んだ友人に電話したり、メールを出したりする
	12 友人や知人にお菓子や飲み物をあげる
	13 友人にお金を貸す
他人	14 友人や知人が何か落としたとき、拾うのを手伝う
	15 電車やバスなどで、他人の荷物を網棚にのせてあげる
	16 知らないお年寄りの重い荷物を持ってあげる
	17 他人がケガをしたり急病になったとき、介抱したり救急車を呼んだりする
	18 知らない人が何か探しているときには、こちらから声をかける
	19 知らない人の自転車が倒れていたとき、起こしてあげる
	20 道でつまづいたりして転んだ他人を助け起こす
	21 知らない人に自動販売機や切符売機などの使い方を教えてあげる

表-9

共感性プロセス尺度	
他者感情への敏感性	1 人のちょっとした気分の変化に敏感である。
視点取得	2 他者をよく理解するために、相手の立場になって考えようとする。
感情共感（ポジティブ）	3 他の人が嬉しそうにしているのを見ただけで、自分も嬉しくなる。
感情共感（ネガティブ）	4* 悲しんでいる相手といても、自分はその人のように悲しくならないほうだ（*）
他者志向的反応（ネガティブ）	5 いじめられている人を見ると、かわいそうで胸が痛くなる。
他者志向的反応（ポジティブ）	6 他の人が幸せそうにしている光景を見ると、暖かい気持ちになる。

仮説 2 を検証するためには、道徳性を計測する必要がある。道徳性をどのように定義し、定量化するかについては定説となる手法が存在しているわけではないが、本研究では、次のような考え方で、3 つの尺度「対象別利他行動尺度」「共感性プロセス尺度」「大衆性尺度」を使用することとした。

a) 対象別利他行動尺度

小田ら²⁴⁾は大学生 126 名に、日頃行っている「思いやり」の行動の例を、対象者を明確にした上で挙げるよう要請し、回答の中で多く挙げられた行動を分類し、かつ行動の対象を「家族」「友人・知人」「普段から付き合いのない他人」の 3 パターンに分けて整理した。こうした得られた「思いやり行動」に関するデータに対し因子分析を繰り返すことで、「対象別利他行動尺度」を開発している。この尺度は、「家族」「友人」「他人」のそれぞれについて、思いやりがあるとされる行動に関する設問が各 7 問ずつ、合計 21 問設定されている（表-8）。本研究ではこれらの質問に対し、「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらでもない」「やや当

てはまる」「とても当てはまる」の 5 件法で回答を求めた。

b) 共感プロセス尺度

葉山ら²⁵⁾の作成した「共感性プロセス尺度」は、「他者感情への敏感性」「視点取得」「感情共感（ポジティブ）」「感情共感（ネガティブ）」「他者志向的反応（ネガティブ）」「他者志向的反応（ポジティブ）」の 6 つの項目群から成っている。この尺度は、「他の人が嬉しそうにしているのを見ただけで、自分も嬉しくなる。」「いじめられている人を見ると、かわいそうで胸が痛くなる」といったように、ネガティブな感情、ポジティブな感情どちらも考慮しながら、「他者の感情にどれだけ共感できるか」を計測するものである。葉山らは、この尺度と社会的スキル尺度²⁶⁾や新性格検査（柳井ら²⁷⁾、との相関を調べることで、本尺度が他者に対する共感の持ちやすさの度合いを測定する指標として妥当であることを確認している。この尺度は質問数が膨大であるため、葉山ら（2008）の研究の中で行われた主成分分析の結果を参照し、各下位尺度で最も負荷量の大きな 1 問ず

表-10

大衆性尺度	
傲慢性	1 自分を拘束するのは自分だけだと思う
	2 自分の意見が誤っていることなどない、と思う
	3 私は、どんな時でも勝ち続けるのではないかと、と何となく思う
	4 自分個人の“好み”が社会に反映されるべきだと思う
	5 どんな時も自分を信じて、他人の言葉などに耳を貸すべきではない、と思う
	6 “ものの道理”には、あまり興味がない
	7 物事の背景にあることには、あまり興味がない
	8* 日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う
	9 世の中の問題は、技術ですべて解決できると思う
	10 人は人、自分は自分、だと思ふ
	11 自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されないことだと思う
	12 道徳や倫理などというものから、自由に生きていきたいと思う
自己閉塞性	13* 伝統的な事柄に対して敬意と配慮を持っている
	14* 日々の日常生活は、感謝すべき対象で満たされている
	15* 世の中は驚きに満ちていると感じる
	16* 我々には、伝統を受け継ぎ、改良を加え、伝承していく義務があると思う
	17* 自分自身への要求が多いほうだ
	18* そもそも奉仕すべき対象がなくなれば、生きている意味がなくなるのではないかと思う
	19* 自分は進んで義務や困難を負う方だ

つを選定して合計 6 問を簡易的な指標として使用することとした(表-9)。全質問に対し、「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらでもない」「やや当てはまる」「とても当てはまる」の 5 件法で回答を求める。

c) 大衆性尺度

「大衆性尺度」は、「傲慢性」「自己閉塞性」という二つの下位尺度なら成る尺度であり、前者 12 問、後者 7 問の計 19 問で構成されている(表-10)。羽鳥ら(28)は、ホセ・オルテガ著『大衆の反逆』の記述を参考に、「大衆人」(これは所得や学歴や社会的身分ではなく、「精神の階級」を表すとされる概念である)の特徴として記述されている箇所を抜き出し、その原文の意を汲み取りつつ質問項目を作成し、因子分析を繰り返した上で、質問を構成している。

4. 分析結果

(1) 尺度整理

まず、基本的な集計及び分析に先立って、独自に質問文を設定した「サムウェア・エニウェア尺度」「新自由主義支持意識尺度」について、因子分析を行って項目の整理と因子構造の把握を行う。なお、サムウェア・エニウェア尺度については、後述の理由により、主成分分析を行うことで 1 次元の「サムウェア傾向尺度」への合成を合わせて行う。

a) サムウェア・エニウェア尺度に関する因子分析

サムウェア・エニウェア尺度を構成する計 16 の質問

項目に関し、2 因子から成る構造を仮定して因子分析(プロマックス回転)を行った。共通性が著しく低い項目や、複数の因子に高い負荷を持つ項目を含めない方針で、項目の除去を行いながら分析を繰り返し、最終的に表-11 のような因子パターンを得た。設問意図と矛盾しない形の 2 因子構造が得られたため、表-11 に掲載した各質問項目の平均を取ることで、サムウェア尺度・エニウェア尺度とする。

ただしこの尺度には、サムウェア尺度とエニウェア尺度に正の相関が存在するという難点がある。グッドハートの議論は、社会に属する人々がサムウェアとエニウェアに分割されることを前提にしているが、本尺度上には、「サムウェア度とエニウェア度がともに高い(あるいは低い)人」が一定数存在することになる。しかしこのことは、必ずしも不自然であるとも言えない。サムウェアの価値観もエニウェアの価値観もともに、人間が多少なりとも抱き得る可能性の価値観である以上は、両方に共感を示す個人が存在しても不思議ではないからである。本尺度の質問項目は、いずれも、何らかの意味で好ましいとされる(言わば善意であると解釈し得る)内容になっており、サムウェア度とエニウェア度がともに高い人は、総じて社会を改善する意思を強く持つ人であると解釈することができる。

ただし本研究の目的は、サムウェア・エニウェアのいずれかに偏った価値観を持つ人々の間で、政策選択や道徳意識に差異があるか否かを検証することであるから、次節に示すように 2 通りの仕方で、サムウェアとエニウェアの比較を行う。

b) サムウェア・エニウェアの区別を表現する指標

表-11 サムウェア・エニウェア尺度に関する因子分析の結果 (因子パタン・因子間相関)

分類	番号 質問文	因子負荷量		共通性
		第1因子	第2因子	
エニウェア 項目	8 自分は世界市民の一人だと思ふ	0.54	0.12	0.33
	9 世界の人々は人種や男女の違いを問わず、皆平等であると思ふ	0.57	0.04	0.33
	10 自立することや自己実現が、安定性や共同体、伝統よりも大事であると思ふ	0.38	-0.03	0.14
	11 移民を受け入れることや、国境がボーダレスとなることに寛容である	0.68	-0.26	0.46
	12 進学や就職で地域間を移動することをいとわない	0.37	0.08	0.16
15 仕事は人生そのものであり、自己実現である	0.37	0.07	0.16	
サムウェア 項目	1 自分の生まれ育った地域や母国に帰属意識を感じる	0.06	0.44	0.21
	2 海外の人々の幸福よりも、自国民の幸福を優先するべきだと思ふ	-0.27	0.48	0.25
	5 治安が良いことや地域に馴染みがあることは、良いことだと思ふ	0.03	0.62	0.39
	6 秩序や伝統に裏打ちされた社会が望ましいと思ふ	0.07	0.59	0.37
	7 社会においては、自由よりも安全が優先されるべきだと思ふ	0.14	0.52	0.32

因子間相関		
	第1因子	第2因子
第1因子	1.00	0.19
第2因子	0.19	1.00

表-12 サムウェア・エニウェア尺度に関する主成分分析の結果

分類	番号 質問文	主成分負荷量	
		第1主成分	第2主成分
サムウェア 項目	1 自分の生まれ育った地域や母国に帰属意識を感じる	.25	.48
	2 海外の人々の幸福よりも、自国民の幸福を優先するべきだと思ふ	-.01	.51
	5 治安が良いことや地域に馴染みがあることは、良いことだと思ふ	.19	.36
	6 秩序や伝統に裏打ちされた社会が望ましいと思ふ	.19	.34
	7 社会においては、自由よりも安全が優先されるべきだと思ふ	.20	.26
エニウェア 項目	8 自分は世界市民の一人だと思ふ	.41	-.06
	9 世界の人々は人種や男女の違いを問わず、皆平等であると思ふ	.56	-.21
	10 自立することや自己実現が、安定性や共同体、伝統よりも大事であると思ふ	.20	-.08
	11 移民を受け入れることや、国境がボーダレスとなることに寛容である	.34	-.37
	12 進学や就職で地域間を移動することをいとわない	.31	-.07
15 仕事は人生そのものであり、自己実現である	.30	-.01	
	寄与率	.24	.18
	累積寄与率	.24	.42

(第3～第11主成分は表示を省略)

前節で得られたサムウェア・エニウェア尺度に対して主成分分析を行ったところ、表-12のように、「社会改善意識の高さ」と「サムウェア傾向(エニウェア傾向)」と解釈し得る2つの成分への分解が得られた。この第2主成分負荷量を用いて計算した主成分得点を「サムウェア傾向」とし、サムウェア・エニウェアという両方向への偏り(値が大きいくほどサムウェア的、小さいほどエニウェア的であることを意味する)を表現する1次元の変数として利用することとする。これは連続変数であるから、その他の尺度との間で相関を計算したり、回帰分析の変数として解釈することが容易であるという利点がある。

サムウェア・エニウェアの比較を可能にする第二のアプローチは、「サムウェア尺度の得点が高く、エニウェア尺度の得点が低い」グループと、「サムウェア尺度の

得点が低く、エニウェア尺度の得点が高い」グループに着目することである。前者を「サムウェアズ」、後者を「エニウェアズ」として規定することが可能であろう。

そこで以下の分析では、サムウェア尺度の得点が中央値を超え、エニウェア尺度の得点が中央値以下となる回答者を「サムウェアズ」、逆にサムウェア尺度の得点が中央値以下、エニウェア尺度の得点が中央値を超える回答者を「エニウェアズ」と規定することとする。なお、サムウェア尺度とエニウェア尺度がともに中央値を超える回答者は「社会改善意識の高い人」、ともに中央値以下となる回答者は「社会改善意識が低い人」と解釈されるが、これらのグループの性質については、本研究の分析目的との関連性が希薄であることから、分析対象外とする。

c) 新自由主義支持意識尺度の因子分析

表-13 新自由主義支持意識尺度に関する因子分析の結果 (因子パターン・因子間相関)

分類	番号	質問文	因子負荷量			共通性
			第1因子	第2因子	第3因子	
(1) 新自由主義的成長戦略	5	大阪都構想は推し進めるべき政策だと思っていた	0.58	0.06	-0.09	0.34
	7	民営化は国の目指す方向性として正しいと思う	0.55	0.04	0.07	0.36
	8	IR(統合型リゾート)政策は推し進めるべきだ	0.76	-0.23	-0.03	0.44
	9	観光立国は推し進めるべきだ	0.62	-0.06	0.08	0.38
重複(1・2)	10	日本は企業や法人にもっと投資促進を図るべきだ	0.36	0.30	-0.02	0.32
(2) 古い日本からの脱却	1	日本には無駄な規制が多すぎる	-0.17	0.60	-0.03	0.28
	2	日本が豊かになるには、国際競争に勝たねばならない	0.15	0.65	-0.22	0.44
	3	日本が経済成長をとげるには、日本の古い体質を変えねばならない	-0.06	0.64	0.16	0.48
重複(2・3)	4	日本が豊かになるには、グローバル化を推進すべきだ	0.19	0.35	0.32	0.47
(3) 世界の常識への順応	11	夫婦別姓が正しいあり方だと思う	-0.03	-0.11	0.69	0.42
	12	同性婚は認められるべきだと思う	-0.04	-0.10	0.63	0.34
	13	禁煙の波はもっと広がるべきだと思う	-0.02	0.09	0.29	0.11
	14	インフラ建設などの公共事業は削減すべきだと思う	0.05	0.01	0.29	0.10

因子間相関			
	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子	1.00	0.50	0.38
第2因子	0.50	1.00	0.42
第3因子	0.38	0.42	1.00

表 14 尺度の基本統計量

尺度名	下位尺度名	平均	標準偏差	α
サムウェア・エニウェア尺度	サムウェア度	3.63	2.87	0.64
	エニウェア度	3.16	3.47	0.65
新自由主義支持意識尺度	新自由主義的成長戦略	3.09	3.15	0.72
	古い日本からの脱却	3.51	3.06	0.70
	世界の常識への順応	3.27	3.02	0.57
対象別利他行動尺度	利他行動尺度(家族)	3.99	5.01	0.89
	利他行動尺度(友人)	3.32	5.34	0.86
	利他行動尺度(他人)	3.22	6.09	0.91
共感性プロセス尺度		3.45	3.70	0.73
大衆性尺度	傲慢性	2.57	5.82	0.74
	自己閉塞性	2.87	3.85	0.70

次に、新自由主義支持意識尺度を構成する計 14 の質問項目に関し、因子分析(プロマックス回転)を行った。共通性が著しく低い項目や、複数の因子に高い負荷を持つ項目をなるべく含めない方針で(ただし後述のとおり、2つの項目について、解釈上自然であったことから複数の因子への帰属を許容することとした)、仮定する因子数の変更及び項目の除去を行いながら分析を繰り返し、最終的に表-13のような因子パターンを得た。分析の結果得られた因子パターンを見ると、概ね自然に解釈することが可能な因子構造が得られている。

第1因子は、「大阪都構想」「民営化」「IR」「観光立国」というように、我が国の成長を促す戦略として具体的なプロジェクトを推進することに賛同する意識を表していると言えるため、「新自由主義的成長戦略」尺度と呼ぶこととする。

第2因子は「無駄な規制」の撤廃、「国際競争」の重視、「古い体質」の改革を通じて、「古い日本」からの脱却を図るべきであるという意識を表すものと解釈することができるため、「古い日本からの脱却」尺度と呼ぶ

こととする。

なお、「日本は企業や法人にもっと投資促進を図るべきだ」という項目は、第1因子と第2因子の双方に一定以上の負荷を持っているが、これは、成長戦略の方策として解釈することも、古い日本からの脱却として解釈することも可能であることから、両方の因子に帰属する項目として、除去しないこととした。

第3因子は、直接的に新自由主義と言われる経済思想に強く関わっているわけではないものの、いわゆる「グローバル・スタンダード」や「世界の常識」を肯定し、グローバル化に前向きになる傾向と親和的な項目であると解釈できる。そのため、「世界の常識への順応」尺度と呼ぶこととする。

「夫婦別姓」は、世界的には珍しいものではない。また「同性婚」も、欧米を中心に、許容すべきであるとの価値観が広がりつつある。「禁煙」についても、東京オリンピック開催に向けて東京都内の禁煙化が進められているように、グローバル・スタンダードとなりつつある。そして「公共事業の削減」は、そのこと自体は必ずしも

表 15 新自由主義政策支持意識尺度とサムウェア尺度の相関分析

新自由主義支持意識尺度	サムウェア傾向 (1次元化)	2つの尺度との相関		相関係数の差の検定	
		サムウェア度	エニウェア度	z値	p値
新自由主義的成長戦略	0.05	0.20 **	0.31 **	-2.97	0.00 **
古い日本からの脱却	0.16 **	0.28 **	0.24 **	1.23	0.22
世界の常識への順応	-0.15 **	0.01	0.33 **	-8.40	0.00 **

(**: p<.01; *: p<.05)

相関係数の差の検定はMeng-Rosenthal-Rubin法による

「世界の常識」となっているわけではないものの、欧米先進国においては 80 年代以来、「小さな政府」の下での「緊縮財政」が志向される傾向にあり、公共事業削減はこの思潮に合致していると言える。

なお、「グローバル化を推進すべきだ」という項目は、第 2 因子と第 3 因子の双方に一定以上の負荷を持っているが、これは「古い日本からの脱却」の一部であると解釈することも、「グローバル・スタンダードへの順応」と解釈することも可能であることから、両因子に帰属する項目として、除去しないこととした。

以上の結果から、「新自由主義的成長戦略」5 項目、「古い日本からの脱却」4 項目、「世界の常識への順応」5 項目という 3 つの下位尺度を持つ尺度として、新自由主義支持意識尺度が構成された。

(2) 基本統計量

今回計測した各尺度の基本統計量は、表-14 のとおりである。サムウェア・エニウェア尺度、「世界の常識」への順応尺度については α の値は 0.7 を下回っているが、対応する設問数が 5 問前後のスケールの小さい尺度において α が 0.6 付近の値をとっている点から一定程度の信頼性は得られていると考えられる。またその他の尺度については α が 0.7 を上回る値をとっており一定程度の信頼性が得られた。

(3) 新自由主義政策支持意識にサムウェア・エニウェア性が与える影響についての分析

a) 1 次元化した「サムウェア傾向」と新自由主義支持意識の相関

まず、サムウェア傾向と新自由主義意識の相関を分析を行った。結果は表-15 のとおりであるが、サムウェア傾向は「『古い日本』からの脱却」と有意な正の相関を示し、「『世界の常識』への順応」が有意な負の相関を示している。「新自由主義的『成長戦略』」については、無相関という結果となった。

「『世界の常識』への順応」と負の相関が存在するのは、本研究の仮説 1 を支持する結果である。「グローバル化」「夫婦別姓」「同性婚」「禁煙」「緊縮財政」といった世界のトレンドを肯定する人は、否定する人に比

べて、エニウェア傾向を持つということである。

「新自由主義的『成長戦略』」との間で有意な相関がなかったことは、仮説 1 を支持しない結果である。これについては、「観光立国」や「民営化」といった改革の方向性が、すでに我が国でも社会的に広く共有されてしまっており、一種の常識として定着する形で、主張に差異が生まれにくくなっている可能性がある。

そして「『古い日本』からの脱却」については、サムウェア傾向の高い人ほどより強く支持する結果となり、本研究の仮説 1 に反する結果となっている。グッドハートの仮説が正しければ、自分の国の「伝統的な在り方」をサムウェアズは好むはずであるが、その逆に「新しい日本」の姿を目指しているというわけであり、想定とは逆の結果が得られた。これについては注意深く検討する必要があるが、「『古い日本』からの脱却」を構成する質問文を改めて確認すると、

「日本は企業や法人にもっと投資促進を図るべきだ」

「日本には無駄な規制が多すぎる」

「日本が豊かになるには、国際競争に勝たねばならない」

「日本が経済成長をとげるには、日本の古い体質を変えねばならない」

「日本が豊かになるには、グローバル化を推進すべきだ」

と、全項目に「日本」という表現が含まれている点が特徴的である（「新自由主義的成長戦略」「世界の常識への順応」には、「古い日本からの脱却」との共通項目を除いて、「日本」という表現は含まれない）。慎重に解釈すべきではあるが、サムウェア傾向の強い人は地域アイデンティティとともに「ナショナル・アイデンティティ」を重んじており、「日本」をより良くするという方向の主張に対しては、サムウェア傾向の弱い人よりも敏感に反応しやすいという可能性が考えられる。これと似た現象として、大阪維新の会や日本維新の会への大阪府民の支持意識を調べた善教 29)の研究で、具体的な政策内容よりも維新の会が「大阪を代表する政党」というイメージが支持意識の増進要因になっているという指摘がある。今後、「日本」という文言の有無を他の尺度とも統一した上で改めて検証するなどの追加研究

表-16 新自由主義支持意識に対する重回帰分析の回帰係数の比較

従属変数	標準化偏回帰係数		係数の差の検定
	サムウェア度	エニウェア度	p値
新自由主義的成長戦略	0.16	0.29	0.01
古い日本からの脱却	0.25	0.20	0.24
世界の常識への順応	-0.03	0.33	0.00

(**: p<.01; *: p<.05)

表 17 新自由主義的政策支持意識尺度とサムエニグループにおける t 検定

尺度	グループ	N	平均値	標準偏差	t検定		
					t値	自由度	p値
新自由主義的成長戦略	サムウェアズ	275	2.98	0.70	-1.81	499	0.07 †
	エニウェアズ	226	3.09	0.58			
古い日本からの脱却	サムウェアズ	275	3.54	0.60	1.14	499	0.26
	エニウェアズ	226	3.47	0.62			
世界の常識への順応	サムウェアズ	275	3.10	0.72	-6.19	486	0.00 **
	エニウェアズ	226	3.44	0.50			

(**: p<.01; *: p<.05; †p<.10)

が必要であろう。

b) 「サムウェア度」「エニウェア度」と新自由主義政策支持意識の関係

次に、サムウェア度・エニウェア度と新自由主義政策支持意識の「相関係数の差」に着目する。これも表-15の通りであるが、「新自由主義的成長戦略」「世界の常識への順応」に関しては統計的に有意な水準で、エニウェア度との相関がサムウェア度との相関よりも高かった。これは、サムウェア度よりもエニウェア度のほうが、これらの政策意識と明瞭な関係を持っていることを意味しており、仮説1を支持する結果であると言えるであろう。

「古い日本からの脱却」については、サムウェア度との相関係数のほうがやや高いが、その差は統計的に有意ではないという結果となり、サムウェア・エニウェアの違いが現れにくい政策項目であることが明らかとなった。

c) 重回帰分析

次に、サムウェア度とエニウェア度を説明変数とし、新自由主義政策支持意識を従属変数とする重回帰分析において、サムウェア度・エニウェア度それぞれの回帰係数を比較することにより、どちらの尺度が新自由主義政策支持意識により強い効果を及ぼしているかを確認する。

比較を簡単にするため、表-16に、サムウェア度・エニウェア度それぞれの標準化偏回帰係数と、両者が統計的に有意な差を持つか否かの検定結果のみを取りまとめた。

ここで、標準化偏回帰係数の差は、サムウェア度とエニウェア度を一つの「尺度得点」という変数とし、「サムウェア度については0、エニウェア度については1」になる尺度ダミー変数を作成して、「尺度得点」「尺度

ダミー」「両者の交互作用」を投入する重回帰分析を別途行い、交互作用が有意となるか否かを検定したものである。

検定の結果、「新自由主義的成長戦略」と「世界の常識への反応」を従属変数とする場合については、エニウェア度の標準化偏回帰係数が、サムウェア度のそれよりも、統計的に有意に大きいことが明らかになった。これは、サムウェア度が1標準偏差分上昇したときよりも、エニウェア度が1標準偏差分上昇した時のほうが、政策支持意識の上昇幅が有意に大きいことを示しており、仮説1を支持する結果であると言える。

ただし「古い日本からの脱却」については、サムウェア度の係数のほうがやや高いものの、統計的に有意な水準ではなく、サムウェア・エニウェアの間で違いが生じにくい政策項目であることがここでも確認された。

d) グループ分けによる t 検定

「サムウェア尺度の得点が中央値よりも高く、エニウェア尺度の得点が中央値以下である」グループを「サムウェアズ」、その逆に「サムウェア尺度の得点が中央値以下であり、エニウェア尺度の得点が中央値よりも高い」グループを「エニウェアズ」と規定し、両方が高い人及び両方が低い人から区別する形で、グループ化を行った。

こうして得られた「サムウェアズ」「エニウェアズ」のそれぞれに属する回答者の、新自由主義的政策支持意識尺度の得点を比較し、t検定を行った(表-17)。

結果を見ると、「古い日本からの脱却」では有意差はなく、「世界の常識への順応」では有意であり、エニウェアズの回答の平均値が高いことが分かった。また、「新自由主義的成長戦略」においてはエニウェアズの回

表-18 サムウェア尺度と各種尺度の相関関係

尺度名	サムウェア傾向 (1次元化)	2つの尺度との相関		相関係数の差の検定	
		サムウェア度	エニウェア度	z値	p値
大衆性(傲慢性)	-0.16 **	-0.15 **	0.10 **	-6.53	0.00 **
大衆性(自己閉塞性)	-0.17 **	-0.29 **	-0.26 **	-0.73	0.46
利他性(家族)	0.17 **	0.30 **	0.25 **	1.51	0.13
利他性(友人)	0.02	0.18 **	0.33 **	-4.38	0.00 **
利他性(他人)	-0.05	0.11 **	0.36 **	-6.84	0.00 **
共感性プロセス	0.06 *	0.25 **	0.36 **	-2.96	0.00 **

(**: p<.01; *: p<.05)

相関係数の差の検定はMeng-Rosenthal-Rubin法による

答平均が有意傾向（10%）水準で高く、方向としては仮説1を支持する結果であると言える。

以上の結果を踏まえると、5%水準で有意であったのはエニウェア的傾向を持つ人は「世界の常識への順応」を好むという関係であり、これは仮説1を支持するものである。その他の関係が有意でなかったことについては、今後、一層詳細な検討が必要であろう。

(4) サムウェア・エニウェア度と道徳性の関係

a) 相関分析

仮説2の、「エニウェア的傾向を持つ人は、サムウェア的傾向を持つ人に比べて、道徳性に劣る点がある」について検証するため、サムウェア傾向・サムウェア度・エニウェア度の各尺度と、道徳性に関係すると考えられる各尺度との相関分析を行った(表-18)。

主成分分析により1次元化されたサムウェア傾向に着目すると、まず、大衆性尺度の「傲慢性」「自己閉塞性」とは負の方向で有意な相関を示していた。これらはすなわち、サムウェア的な価値観を持つ人ほど、ホセ・オルテガが『大衆の反逆』で描写したような意味での「大衆人」的傾向が希薄であるということであり、エニウェア的価値観を持つ人はその逆であるということである。これは、仮説2を支持する結果であると言える。

次に、利他性尺度に着目すると、「利他性(家族)」に対してはサムウェア傾向が有意な正の相関をとっていることが分かる。この事実は、エニウェア傾向を持つ人に比べて、サムウェア傾向を持つ人は、家族思いであるということの意味し、これも仮説2を支持する結果と言えるだろう。ただし、「利他性(友人)」「利他性(他人)」については相関が有意ではなく、これらについてはサムウェア傾向ととくに連動するわけではないことが示された。

「共感性プロセス」尺度に関しては、サムウェア傾向との間に正の有意な相関が示された。サムウェア傾向の高い人は、他者に対し共感を持って関わるができるという意味であるが、それは一種の道徳性であるとも解

釈でき、仮説2を支持する結果であると言える。

なおこれらの分析結果の解釈には注意も必要である。まず、有意な相関といっても、その相関係数は0.2に満たない弱いものであって、踏み込んだ解釈をすることについては慎重であるべきだろう。また、これらの結果は相対的なものであって、たとえば利他性や共感性がどの程度以下であれば人間が現実に耐え難い「不道徳」を感じるかというのは、別の問題である。

また、「サムウェア傾向」は主成分分析によって「よりよい社会を望む意識の高さ」を取り除き、偏りを議論するために導き出した指標である点にも注意が必要である。実際にはサムウェア的価値観も、エニウェア的価値観も、この「よりよい社会を望む意識の高さ」を含んだものとして現れるので、エニウェア的価値観を支持しているからといって、直ちにその人が不道徳であるとは言えない可能性がある。

なお、「よりよい社会を望む意識」を除去していないサムウェア度・エニウェア度との関係に注目すると、「サムウェア傾向」では有意ではなかった「利他性(友人)」「利他性(他人)」の2項目に加え「共感性プロセス尺度」についてもサムウェア度との相関に比べて強い正の相関が得られおり、差の検定も有意であったことからこれは仮説2に反する結果である。しかし、傲慢性に注目するとサムウェア度は負の相関、エニウェア度は正の相関を示しており、差の検定も有意であることから「エニウェアズはサムウェアズに比べて傲慢である」と言う仮説2を支持する結果が得られた。利他性に関する解釈として、エニウェアズは、地元を離れて様々な土地で働くことをいとわない人々であり、多くの「友人」を作りまた多くの「他人」と関わる生活を送りがちであると考えられる。こうした人々は、家族思いのサムウェアとは別の形で、対人道徳を築き上げている可能性もある。

b) 重回帰分析

次に、サムウェア度とエニウェア度を説明変数とし、道徳性各指標を従属変数とする重回帰分析において、サムウェア度・エニウェア度それぞれの回帰係数を比較す

表-19 道徳性に対する重回帰分析の回帰係数の比較

従属変数	標準化偏回帰係数		係数の差の検定
	サムウェア度	エニウェア度	p値
大衆性(傲慢性)	-0.17	0.12	0.00 **
大衆性(自己閉塞性)	-0.26	-0.23	0.47
利他性(家族)	0.27	0.21	0.15
利他性(友人)	0.13	0.32	0.00 **
利他性(他人)	0.07	0.35	0.00 **
共感性プロセス	0.21	0.33	0.01 **

(**: p<.01; *: p<.05)

表-20 道徳性に関するグループ間比較 (t検定)

尺度	グループ	N	平均値	標準偏差	t検定		
					t値	自由度	p値
大衆性(傲慢性)	サムウェアズ	275	2.42	0.46			
	エニウェアズ	226	2.57	0.47	-3.62	499.00	0.00 **
大衆性(自己閉塞性)	サムウェアズ	275	2.86	0.54			
	エニウェアズ	226	2.89	0.56	-0.73	499.00	0.47
利他性(家族)	サムウェアズ	275	4.02	0.66			
	エニウェアズ	226	4.03	0.72	-0.21	499.00	0.84
利他性(友人)	サムウェアズ	275	3.21	0.82			
	エニウェアズ	226	3.48	0.77	-3.82	499.00	0.00 **
利他性(他人)	サムウェアズ	275	2.99	0.95			
	エニウェアズ	226	3.42	0.83	-5.39	496.92	0.00 **
共感プロセス	サムウェアズ	275	2.91	0.56			
	エニウェアズ	226	3.09	0.49	-3.89	497.20	0.00 **

(**: p<.01; *: p<.05; †: p<.10)

ることにより、どちらの尺度が道徳性により強い効果を及ぼしているかを確認する。

比較を簡単にするため、表-19に、サムウェア度・エニウェア度それぞれの標準化偏回帰係数と、両者が統計的に有意な差を持つか否かの検定結果のみを取りまとめた。なお、検定は(3)と同様の方法で行った。

検定の結果「大衆性(傲慢)」「利他性(友人)」「利他性(他人)」「共感性プロセス」を従属変数とする場合については、エニウェア度の標準化偏回帰係数が、サムウェア度のそれよりも、統計的に有意に大きいことが明らかになった。「大衆性(傲慢)」に注目すると「エニウェアズはサムウェアズよりも傲慢である傾向がある」ことを示しており、仮説2を支持する結果であると言える。しかし、「利他性(友人)」「利他性(他人)」「共感性プロセス」が従属変数の場合に注目すると「エニウェアズはサムウェアズよりも友人、他人に優しく、共感性が高い」ということを示しており仮説2に反する結果が得られた。

c) グループ分けによるt検定

サムウェア度・エニウェア度の一方が高く他方が低いという基準でグループ化した「サムウェアズ」「エニ

ウェアズ」の間で、道徳性に関わる尺度の得点が異なるか否かを、t検定により検証する。分析結果は表-20のとおりである。

まず、「傲慢性」に関して、エニウェアズのほうが有意に高い値を示した。これは、仮説2に合致する結果であると言える。

しかし「利他性(友人)」「利他性(他人)」「共感性プロセス」については、エニウェアズのほうがサムウェアズよりも平均値が有意に高く、仮説に反する結果となった。この理由として考えられるのは、何度か述べているように「サムウェア度」と「エニウェア度」には「社会をよりよくすべきだという意識の高さ」が含まれており、それは表-12の主成分分析における第1主成分に相当するが、主成分負荷量を見ると、サムウェア尺度よりもエニウェア尺度のほうが、第1主成分への負荷量がやや高い。つまり、サムウェア尺度よりもエニウェア尺度の方に、「社会をよりよくすべきだという意識の高さ」がより色濃く含まれている可能性があり、その場合、「エニウェア尺度得点が高くサムウェア尺度得点が高い」回答者は、「エニウェア尺度得点が低くサムウェア尺度得点が高い」回答者よりも、社会改善の意識を強く持つ

ている可能性がある。このことが、表-20 のグループ間比較において、エニウェアズの道徳性を高める要因として表れた可能性がある。

この結果は、前節の結果を解釈するにあたり一定の留保が必要であることを示していると言える（また、表-16 の新自由主義尺度との関連を解釈する上でも、この点に留意は必要であろう）。ただし、前節で使用した「サムウェア傾向」は、社会改善の意識を取り除いた指標であり、本節のグループ分けよりも純粹な形で、サムウェア的・エニウェア的という性質を評価できているとも考えられ、これらを総合すると、表-20 の結果が仮説 2 を強く反証するものであると理解する必要はないのではないかと考えられる。

5. 総合考察と今後の課題

本研究の結果を踏まえると、サムウェア・エニウェア傾向が新自由主義的政策への支持意識を左右していることが見てとれるため、「右と左」「保守とリベラル」「上流と下流」のような伝統的対立軸に加えて、地域定住への選好をコア概念とする「サムウェア」「エニウェア」という価値観体系を考慮することが、現代の国民の政治意識を把握する上では、有用であることが示されたと言える。グッドハートのサムウェア・エニウェア理論は、間接的なデータと定性的な考察により導き出されたもので、そのことの定量的・実証的裏付けがこれまで得られていなかったが、日本という異なる地域環境においてであるが、本研究によって初めてそのエビデンスが裏付けられたことになる。

より詳しくみると、エニウェアズはサムウェアズに比べて、「世界の常識」に順応してグローバルスタンダードを日本へも導入すべきであるという考えに傾きがちであることが分かった。一方、「古い日本からの脱却」については、サムウェアズのほうがむしろ強く支持する結果が得られたが、これは質問文の構成に着目すると、「日本」というキーワードにサムウェアズが強く反応し、「ナショナリズム」の一種がここに表れた可能性も考えられる。この点については今後、質問項目を工夫することにより一層の研究が必要になる。

次に道徳性を表す心理変数とサムウェア傾向の相関関係を分析した結果、サムウェア傾向が「傲慢性」「自己閉塞性」を低減する傾向と「利他性（家族）」を増進する傾向が確認された。つまり、「サムウェアズはエニウェアズに比べて大衆性が低く、家族に優しい」と解釈することができる。これは、仮説 2 を一定程度支持する結果である。ただし、社会改善意思を取り除かない状態でのサムウェア度・エニウェア度を用いて回答者をサムウ

ェアズ・エニウェアズにグループ化した場合、必ずしも仮説と合致しない結果も得られている。

4 章でも述べたとおり、こうした結果になった原因はいくつか考えられるものの、追加的な研究が行われることが望ましく、単純に「エニウェアズは不道徳である」と強く解釈することは本研究結果の範囲内では控えたほうが良い可能性がある。ただし、大衆性との関連が明らかになったことは本研究で最も注目すべき結果である。大衆性以外の道徳項目については、いわゆる「社会的望ましさ」バイアスが混入する恐れがあるのに対し、大衆性尺度はその性質上、どの質問にどのように答えることが肯定的・否定的な意味を持つかは想像しにくい尺度となっており、より精神の深層にある、偏りのない道徳性を計測することが可能な尺度であると考えられるからである。

本研究の結果は、大筋で、グッドハートの「サムウェア・エニウェア」理論が、現代の市民の価値観を理解する上で重要なフレームワークであるという可能性を示唆するものである。グッドハートは、グローバル化や規制緩和が経済的に合理性を持つこともあるものの、近年の先進国ではその傾向が過剰になり、社会が崩壊する恐れがあると警鐘を鳴らしている。本研究の結果は、その警鐘に我々日本人も耳を傾ける必要があることを意味しており、社会をうまく回していくためには、新自由主義化の勢いを一定以下に保ち、改革が必要であったとしてもそれは穏やかに進行させていく必要があるということが示唆される。グッドハートは、今後の先進国はこれまでに比べて、「サムウェアズ」の意向をもっと重視すべきであり、そのことが社会の安定に必要であると述べている。エニウェアズがいくつかの点で道徳性に劣る可能性が示されたこともあり、グッドハートの警告には一定の妥当性があるものと、本研究の結果からも考えられる。

サムウェア・エニウェア尺度そのものについて、課題が 2 つある。既に何度か述べたことであるが、これらの尺度には「社会をより良くしたいという意識」が共通して反映されており、その影響を統制するために分析方法を工夫したり、注意深い解釈を行う必要があった。今後、調査設計のレベルでこの問題をクリアするために、今回のように全ての質問が何らかの意味で「良い」ことを述べたような調査票ではなく、たとえば同程度に「良い」ことを述べている命題からどちらかを選択させるといった方法を採用することで、より中立的な変数を構成することが可能になると考えられる。

また、グッドハートによるとイギリスではサムウェアズが過半数、エニウェアズが 2 割、残りがどちらともいえない人々という様に分類できるということであるが、今回計測した変数はすべて相対的なものであるため、どの閾値を超えるとサムウェア的・エニウェア的であるか

については、議論することができず、したがって現代社会にサムウェアが何割、エニウェアが何割といった考察を行うことはできない。これについては、たとえば今後、サムウェア的価値観の人とエニウェア的価値観の人で賛成・反対が両極化し、支持者・反対者が二峰型の分布を示すような価値観ないし政策が特定できた場合には、その意識を基軸として、ある程度絶対的な意味での「サムウェア」「エニウェア」を論ずることができるかも知れない。

参考文献

- 1) David Goodhart : The Road to Somewhere, Penguin Books, 2017
- 2) Amy Chua : Political Tribes, Penguin Books, 2018
- 3) Amy Chua : Which World Are We Living In?, Foreign Affairs, [accessed 2018.06.25]
- 4) Williams, Joan C(原著), 山田美明(翻訳), 井上大剛(翻訳) : アメリカを動かす『ホワイト・ワーキング・クラス』という人々世界に吹き荒れるポピュリズムを支える“真・中間層”の実体
- 5) Émile Durkheim : 自殺論, 中公文庫, 1985
- 6) Robert D. Putnam : E Pluribus Unum: Diversity and Community in the Twenty-first Century The 2006 Johan Skytte Prize Lecture, Scandinavian Political Studies, 30(2), pp.137-174
- 7) Simone Weil(原著), 山崎庸一郎(翻訳) : 根を持つこと, 春秋社, 2009
- 8) 藤井聡, 羽鳥剛史 : 大衆社会の処方箋—実学としての社会学, 北樹出版, 2014
- 9) J.E.スティグリッツ : 世界に格差をバラ撒いたグローバリズムの正体, 徳間書店, 2006
- 10) 中野剛志 : 富国と強兵, 東洋経済新報社, 2016.
- 11) 中野剛志 : トランプ勝利も Brexit も「衆愚制政治」ではない, 東洋経済 <https://toyokeizai.net/articles-/145294>
- 12) 柴山桂太 : ポピュリズム肯定論, 表現者クライテリオン, 2018年9月号, pp30-55
- 13) 施光恒 : 自由民主主義諸国への警鐘—「ポピュリズム」を真摯に捉えよ, 表現者クライテリオン, 2018年9月号, pp64-71
- 14) ジョーン・C・ウィリアムズ : アメリカを動かす「ホワイト・ワーキング・クラス」という人々, 集英社, 2017
- 15) <http://www.moj.go.jp/content/001233904.pdf>
- 16) Tak Wing Chan, Morag Henderson, Maria Sironi, Jutta Kawalorowicz : Understanding the Social and Cultural Bases of Brexit, Department of Quantitative Social Science, Working Paper No. 17-15, December 2017
- 17) Neil Lee, Katy Morris, Thomas Kemeny : Immobility and the Brexit vote, Cambridge Journal of Regions, Economy and Society, Volume 11, Issue 1, March 2018, Pages 143-163
- 18) Eleonora Alabrese, Sascha O.Becker, Thiemo Fetzter, Dennis Novy : Who voted for Brexit? Individual and regional data combined, European Journal of Political Economy, Volume 56, January 2019, Pages 132-150
- 19) 前村奈央佳 (2011) , 「移動と定住に関する心理的特性の検討: 異文化志向と定住志向の測定および関連性について」, 関西学院大学先端社会研究所紀要 Annual review of the institute for advanced social research, (6), 109-124
- 20) 米原拓矢, 田中 大介 (2015) , 「地元志向と心理的特使絵の関連-新たな発達モデルの構築に向けて-」, 地域学論集, 第11巻, 第3号
- 21) 片岡将・川端祐一郎・藤井聡 (2020) . サムウェアーズとエニウェアーズの違いを考慮した若年層の地方定住促進要因に関する研究, 土木計画学研究発表大会(春) 講演集, 2020.
- 22) 沼尻了俊, 宮川愛由, 林幹也, 竹村和久, 藤井聡(2019), 新自由主義支持意識とその規定因に関する実証的研究—日本低評価意識と新自由主義化スパイラル—, 実践政策学, 5(2), pp.169-166
- 23) 小田亮, 大めぐみ, 丹羽雄輝, 五百部裕, 清成透子, 武田美亜, 平石界 : 心理学研究, 2013, 84(1), pp.28-36
- 24) 葉山大地, 植村みゆき, 萩原俊彦, 大内晶子, 及川千都子, 鈴木高志, 倉住友恵, 櫻井茂男(2008) : 共感性プロセス尺度作成の試み, 筑波大学心理学研究, 36, pp.39-48
- 25) 菊池車夫 (1988) : 思いやりを科学する : 向社会的行動の心理とスキル, 川毎番店
- 26) 柳井晴夫, 相木繁夫, 国生理恵子 (1987) : promax 回転法による新性格検査の作成について (1) , 心理学研究, 58, pp.158-165.
- 27) 羽鳥剛史, 小松佳弘, 藤井聡(2008) : 大衆性尺度の構成——“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析——, 心理学研究, 79(5), pp.423-431

???

A study on the psychological and political tendency
of "Somewheres" and "Anywheres"

Kaito KOBAYASHI, Yuichiro KAWABATA and Satoshi FUJII

In recent years, a theory has been proposed that policy making in developed countries is largely determined by the conflict between two groups: "Somewhars" meaning people rooted in "local" communities, and "Anywheres," meaning people who value activities that transcend regional and national borders. However, few academic attempts have been made to empirically and quantitatively test its validity. In this study, we examined whether this value classification is related to the policy attitudes and personality, and what attributes make people more likely to be Somewhere or Anywhere through a survey. The results suggest that people with strong Anywhere tendencies tend to support neoliberal policies, and that Somewhars are more likely to be moral than Anywheres. The results also suggest that people who have lived in their current location for a long time are more likely to be Somewhars, while differences in income, education, occupation, and location of residence are small.